様式第９号

学位審査結果報告書

学位申請者氏名　植田　愛彦

学位論文題目　**Advocacy of diagnostic criteria for maxillary incisive canal cysts based on alteration of normal maxillary incisive canals according to aging in Japanese populations**

（日本人の正常切歯管の加齢変化とそれをもとにした鼻口蓋管嚢胞の診断基準の提唱について）

審査委員（主査）　吉岡　泉　印

（副査）　瀬田祐司　印

（副査）　笹栗正明　印

学位審査結果の要旨

本研究の目的は、CT 画像においての正常切歯管と鼻口蓋管嚢胞との鑑別点を確立することである。研究対象は、鼻口蓋管嚢胞と診断された患者 40 名の CT 画像および切歯管部分に異常の認められなかった患者（コントロール群）220 名の CT 画像とした。研究対象の CT 画像データをワークステーション上で 3 次元構築し、鼻口蓋管嚢胞およびコントロール群の切歯管の大きさ、形態、CT 値について計測した。

結果は、正常な被験者における切歯管の大きさに有意な差が男性と女性の間で見出された。切歯管の大きさは、加齢により有意に大きくなっていた。切歯管の形状、解剖学的変異、および CT 値は加齢および性差による有意な変化は認められなかった。ただし、矢状断面上で砂時計型の切歯管である場合は、正常切歯管の被験者よりも鼻口蓋管嚢胞の患者が有意に多かった。通常の切歯管と鼻口蓋管嚢胞との間に CT 値に差違はなく、サイズにのみ差異がみられた。しかし、切歯管のサイズ 6 mm という診断基準を用いると、60 歳以上の被験者に対しては鼻口蓋管嚢胞を適切に鑑別はできなかった。60 歳以上では、鼻口蓋管嚢胞は、切歯管のサイズの 7.1 mm をカットオフ値とすることでより適切に鑑別することができた。一方で、60 歳未満の患者では、カットオフ値は従来の 6.0 mm が適正な値であった。

鼻口蓋管嚢胞と正常切歯管の鑑別診断時には、切歯管の長径を基準にすることは有効であるが、性別や加齢に伴う切歯管の長径の変化を考慮すべきであることが示唆された。

本研究の臨床的意義として、鼻口蓋管嚢胞を診断するときは、年齢と性差を考慮する必要があると示唆された。特に、高齢者（60 歳以上）の人においては、従来の基準を超える切歯管のより大きなサイズを基準として使用する必要があると示唆された。

この研究の内容に関して、申請者の植田愛彦氏に対し、主査と２名の副査から、質疑が行われた。研究対象の選択基準、嚢胞および切歯管のサイズの計測方法、結果の解釈、研究の limitation などついて質問したが、概ね適切な回答を得た。総じて、審査委員会では本論文を学位論文として価値あるものと判断した。